

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月13日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(G)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530718

研究課題名（和文）

発達障害児を育てる親のメンタルヘルスと支援リソースに関する臨床心理学的研究

研究課題名（英文）

Psychological study on mental health in parents of children with developmental disabilities and their support resources

研究代表者

髙 倫子 (TAKAMURA TOMOKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：10280570

研究成果の概要（和文）：LD、ADHD等の発達障害の子どもの親（母親・父親）のメンタルヘルス・QOLの特徴を定量的および質的に捉え、支援との関連について心理学的に検討した。その結果、発達障害児の母親の精神的疲労度は父親と比べて高く、危険域にいる割合が9%いた。また、親のQOLには子育ての負担感だけではなく、経済的要因、夫婦関係などが影響していた。また、インタビュー調査の質的分析からは、親の会、療育、専門機関への相談などの支援リソースを利用しながら、親は子どもの支援をと同時に自分自身の成長とケアを模索していることが認められた。

研究成果の概要（英文）：The objectives of this study were to analyze the relation between QOL(quality of life) in parents of children with developmental disabilities and affecting variables in the relation to professional supports and intervention using quantitative and qualitative methods. Mental health of mothers scored significantly lower than those of fathers. Parenting stress, economic satisfaction and children's QOL predict the parents' QOL. The qualitative analysis of interviews and free description revealed that parents associations as well as support organization, professional resources were used for children with developmental disabilities and for parents to walk with their children and to lead their own lives.,

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：発達障害、親、メンタルヘルス、支援リソース

1. 研究開始当初の背景

障害児の親のストレスやメンタルヘルスに関する研究が散見するようになっているが、学習障害（以下LD）、注意欠陥多動性障害（以下ADHD）、広汎性発達障害（以下PDD）の子どもの育てる親のメンタルヘルスや支援については心理学的研究が少ないこと、研究の対象はいずれも母親であり、父親

のメンタルヘルスが扱われていないこと、そして支援の中心は子どもであり、親支援については未だ周辺的に捉えられていることなど、課題が多く残されている。

2. 研究の目的

LD、ADHD、高機能PDDの子どもの親（母親だけでなく父親も含め）のメンタルヘルス

の特徴を定量的に捉え心理学的な分析を行う。また、支援リソースが親にとってどのような意味を持ち、メンタルヘルスの維持にどのような役割を果たしているかを質的に分析し、臨床心理学的考察する。さらに、今後の親支援のあり方を提案する。

3. 研究の方法

1) メンタルヘルスと支援リソースに関する調査研究 (量的研究)

評価すべきメンタルヘルスの観点を含めた質問紙および支援リソースに関する質問紙を、JDDNet に加盟する団体に協力を依頼し、郵送型調査を行う

2) 療育、支援リソースと心理的意味についてのインタビュー調査

4. 研究成果

1) 発達障害の子どもを育てる親の QOL 調査 <対象と方法>

全国 LD 親の会会員で小・中学生の子どもを持つご両親 189 名 (回答率 76%)。調査内容：子どもの行動特性 (SDQ) と QOL (KINDL)、父・母の QOL (SUBI)、子育て感、夫婦協力、社会経済的要因、支援リソースについての期待と満足 調査時期：2011 年 3 月～4 月

<結果>

①子どもの概要と行動・QOL

男子 156 名、女子 31 名、年齢平均は 11.4 歳、小学生 108 名、中学生 81 名
広汎性発達障害あるいは高機能広汎性発達障害 (アスペルガーを含む) の診断を受けている子どもが 116 例、81.7%。

SDQ では「仲間関係」「向社会性」そして「問題行動全体」では半数前後が要支援 (high needs) と評定された。

QOL は総合的得点およびすべての領域において対象群の子どもは標準値より低かった。問題行動、特に情緒的問題が QOL の低さとが関連していた。

②親の QOL

母親 (N=176) 父親 (N=126) の SUBI (主観的 Well-being, WHO) の結果。母親と父親の間では、疲労度の分布において明らかな差があり、父親の 80.0% は疲労度が少ない状態 (レベル 3) にある一方、母親のそれは 58.0%。健康度と疲労度を合わせて心の健康

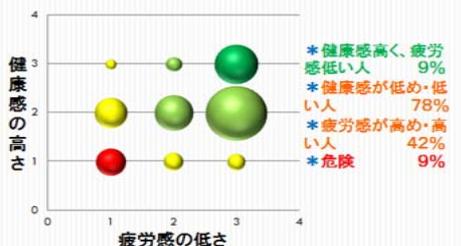


図 母のSUBI:健康感と疲労感

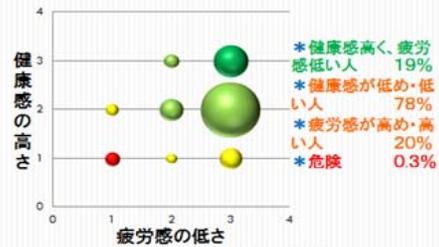
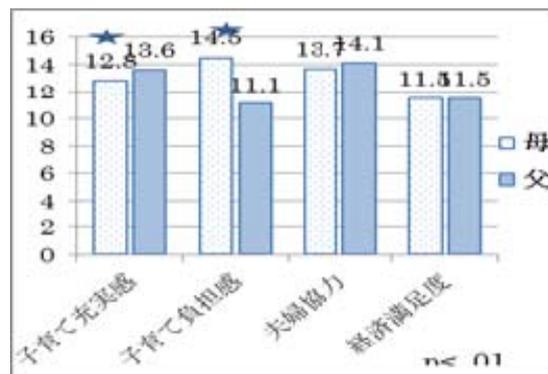


図 父のSUBI:健康感と疲労感

を評価すると、健康度も疲労度もレベル 1 の危険域にある父親は 0.3%、母親は 9%。子育て感、夫婦間の協力、経済的満足について尋ねた結果を図 8 に示す。子育てについて母親の充実感は父親より低く、負担感はより高かった ($t = 2.474, p < .05$; $t = 10.802, p < .001$)。また、子育て感は夫婦間に相関がみられ (充実感 $r = .323, p < .001$, 負担感 $r = .264, p < .01$)。

また、夫婦間の協力 (互いを認めあう) については母親と父親の数値に差はなく、また夫婦間には明らかな相関が認められ ($r = .439, p < .0001$)、経済的満足度においても夫婦間には高い相関がみられた ($r = .668, p < .0001$)。



親の QOL を予測する変数を明らかにするために、SUBI を従属変数とする、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。

母親の QOL は子育ての充実感と負担感、夫婦間の協力、そして経済的満足感によって予測された。母の QOL は子育ての充実感・負担感との関連が強く、また子どもの QOL や行動問題とも関連していたが、QOL を従属変数とした場合のモデルの決定係数 ($R^2 = .512$) が最も高かった。すなわち子どもの QOL や行動問題は子育て感により直接的に影響し、そこを通しては母親の QOL に影響を与えることが推測される。

一方、父の QOL と子どもの QOL や SDQ との間に直接的な関係はみられなかった。しかし、子ども側の要因は子育て感を通して父親の QOL に影響を与えている可能性があった。父の QOL を予測する因子は経済的満足感、子育て感の 2 因子であった。

周囲に働きかけ、支えや拠りどころを模索していく。

③「子どもを守り育む環境を求めていく」
自ら周囲に働きかけていく母親の視点は、「母-子」「母-周囲」にとどまらず、「周囲-子ども」まで広がっていく。子どもの自立も視野に入れつつ、自分の関与しない場面で、子どもがうまく適応できるような環境を求めるようになっていく。

④「自分ケアを見つけていく」
育児の大変さに心身ともに疲弊しきっていた母親が、現実と理想とを調整しながら、自らをケアする方法を見出していき、自己実現を目指していく。

<まとめ>

子どもの問題行動によって身動きが取れなくなっていた母親が、診断や療育相談を機に母親自身が理解され、支えられたと感じたことが明らかになった。そして、わが子や周囲との関係や、自分自身にも目を向けるようになり、その中で障害の理解を深め、母親としての役割を自ら構築している文脈が読み取れた。

早期介入は子どもの療育を主目的とするが、母親にとっても、母親としての基盤を作り、心理的変容を果たしていくプロセスを支える意義も同時に有していることが示唆された。今後は、療育を受けていない母親との比較を含め、早期介入の意義をさらに検討していくことが必要と考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 富永亜由美、篁倫子、原仁、発達障害のある2歳児への早期療育の有用性、お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要、Vol. 12、2010、1-8
- ② 五十嵐一枝、発達障害児の発達、小児の精神と神経、査読有 50巻、2010、379-383
- ③ 五十嵐一枝、発達障害児のSSTと養育不安の変化、成長科学協会研究年報、査読無、32、2009、pp. 311-312

[学会発表] (計7件)

- ① 篁倫子、多職種からみた支援と連携の課題「学童期の課題とフォローアップ-子ども・家族・学校をつなげる支援目指す-、シンポジウム、ハイリスク児フォローアップ研究会、2010.6、名古屋
- ② 篁倫子、通常の学級における様々なニーズをもつ子どもへの多角的な支援-実践との協働から得た知見-、指定討論、

日本LD学会第19回大会、2010.10、名古屋

- ③ 篁倫子、親のQOLと支援に関する調査結果より-父親・母親のQOLに関わる要因の検討-、シンポジウム「発達障害のある子どもをもつ親のメンタルヘルス」(シンポジスト)、日本LD学会第20回大会、2011.9、東京
- ④ 篁倫子、ワークショップ「NICUから学童期まで支援につながる発達フォローアップ-発達段階における課題と心理職の役割-」第56回未熟児新生児学会、2011.11、東京
- ⑤ 篁倫子、学習につまずく子どもへの対応と工夫(話題提供)シンポジウム「子どもの困難に気づくこと、具体的に対応すること」(シンポジスト)、第13回日本子ども健康科学学会、2011.12、東京
- ⑥ 富永亜由美、原仁、篁倫子、広汎性発達障害のある2歳児の早期療育の有用性、第102回小児精神神経学会、2009.10、名古屋
- ⑦ 服部ふみ、吉野諭美子、滝崎優子、篁倫子、原仁、発達障害児の母親の心理的体験-早期に療育相談を受けた母親を対象に-、第45回日本発達障害学会、2010.9、東京

[図書] (計4件)

- ① 篁倫子、第2章医療Ⅲ未熟児出生と発達障害、発達障害白書、日本文化科学社、東京、2009、pp43-44
- ② 篁倫子、障害児の親のメンタルヘルス支援マニュアル第2章、第6章、日本発達福祉連盟、2010、pp11-20、pp69-76
- ③ 篁倫子、対人専門職のための発達障害支援ハンドブック(編著)、発達障害の理解と支援の基本、心理学の専門家の視点から、金剛出版、東京、2012、pp. 31-42、pp. 65-67
- ④ 篁倫子、発達障害児を育てる親のメンタルヘルスと支援リソースに関する臨床心理学的研究(報告書)、2012、90

6. 研究組織

(1) 研究代表者

篁倫子 (TAKAMURA TOMOKO)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・教授

研究者番号：10280570

(2) 研究分担者

五十嵐一枝 (IGARASHI KAZUE)

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号：00338568

(3)研究協力者

原 仁 (HARA HITOSHI)
横浜市中部地域療育センター・センター長

内藤孝子 (NAITO TAKAKO)
特定非営利活動法人全国 LD 親の会・理事
長

山岡修 (YAMAOKA SHU)
特定非営利活動法人全国 LD 親の会・理事